

一一つの月

佐藤俊明

道路ぎわにある出版部の一室で休んでいたら、ゆつ

くり坂道を登つてくる人たちの会話が耳に入つた。聞くともなしに聞くと……「ここは曹洞宗の大本山總持寺。いま一つの大本山は福井にある永平寺……」

誰だろう?と思つて立上がり、垣根越しに見ると、それは門前で商店を經營しているM氏で、遠くから来

たらしい数人の客を案内しているのだつた。

「一宗に大本山が二つあるのはどういうわけか?」

「ホラ、一軒の家にお父さんとお母さんがいるのと同じですよ。永平寺がお父さん、こちらはお母さん」

「どつちが勢力強いのかね?」

「そりあ、お母さんの方ですヨ」

M氏は自慢そうに答えた。

「じや、ノミの夫婦だナ……。して、この建物は?」

と、すぐ目の前にある鶴見大学の体育館を指さして

たずねた。

「何しろえらい精力のお母さんなんで、女の子ばかりの大学を經營してるんですよ。開祖さまはこうして“生めよふやせよ”で大宗門をきずきあげたんですよ」

「開祖はなんという人?」

「瑩山さまだ」

「道元さんは知つてるが、瑩山さんは知らんないア」

「そうそう、どこのお母さんも無名なんですよ。そこがまたえらいところで……」

なるほど!と感心して聞いた会話のひとつまだが、さて、その大本山總持寺開創に当つて、瑩山禪師と一心同体の活躍をして、今日の宗門興隆の基礎をつくつたのが峨山禪師である。

峨山は、十六歳のとき比叡山に登つて出家し、八年間、仏教学、特に天台の教學を修め、その蘊奥を究め



た。しかし、眞の宗教的安心は学問仏教では得られないことを悟り、比叡山を下つて瑩山禪師の会下に投じて禪の修行にはげんだ。彼は資性英敏にして筋骨逞しい偉丈夫で、見るからにたのもしく、瑩山禪師は、よき後繼者に恵まれたことをよろこんだ。反面、峨山の、

頭のよさを自負している様子、人をしのぐ高ぶりの態度には、心ひそかに案ずるところあり、「いつか機会を見て」と、時節の当來を待つていた。

冬の或る夜、月は中天に明るくさえわたり、山も河も、野も里も、清らかな月光に照らされ、えもいわれぬ美しい光景を描き出しており、身も心もそぞろに光に映徹するかのようであつた。

瑩山禪師は、ふと思いついたかのように、

「峨山和尚、月に両箇（二つ）あることを知つてゐるか？」

「たずねた。」

「しりません」

峨山にはなんのことやら合点がいかなかつた。

返事をためらつてゐる峨山を見て、瑩山禪師は、低いが、おごそかな口調で言つた。

「月に両箇あることを知らずんば、洞上の種草となしがたし」（月に二つあることがわからないようでは、曹洞宗の禅法を天下に弘める第一人者と許すことはできない）

日ごろになきびしい瑩山禪師の言葉に、峨山はかつて経験したこともない強い襲撃を受けた。そのとき、彼の脳裡に去來したものは——、

そのかみ、唐代の傑僧香嚴和尚は師匠の鴻山靈祐禪師（前出『以心伝心』）から、

「お前は何一つ知らんこともないほど聰明博学だが、わしはお前が本で覚えたことには用はない。お前がお母さんの胎内を出る前、西も東も分らんさきのお前自身の一句を聞きたい」

といわれ、何か答えると、

「それは眼で見たこと」

「それは耳で聞いたこと」

「それは本で書いてある」

といつて、鴻山禪師はいつこうにうけあわない。困

りはてた香嚴が、

「どうか私のために説いてください」

と願うと、鴻山禪師は、

「私が説くことのできるのは私の言葉であつて、お前

の一句には関係がない」

と、突っぱねる。

香嚴は、これまで学んだ書箱やノートを取出して調べてみたが一句も見出せない。ぼう然自失した香嚴は、絵に描いた餅では腹はふくれない」とて、本やノートの一切を焼き捨ててしまい、

「この世で仏法を学ぶことはあきらめよう。一箇の凡僧として生き、もうこれ以上きびしい求道の生活に心を労ることはやめよう」

といい、泣き泣き鴻山禪師のもとを去り、そして、

南陽慧忠（生于七七五年）の遺跡をたずねて武当山に入

り、禅師の庵のあつたところ庵をむすび、その周囲に竹を植え、その竹を友として坐禅にはげんでいた。或るとき、道路を掃除していたら、箒のさきにあたつたカワラのかけらが飛んで竹にあたり、カーチンとひびきを立てた。そのとき豁然として大悟した。そこで直ちに沐浴潔斎して香をたき、はるか大鴻山を望んで礼拝して言つた。

「大鴻大和尚さま。あのとき私に一句を言つてきかせてくれたなら、今日の喜びはとうてい体験できなかつたでありますよう。大和尚さまのご恩は父母の恩にもまさるものですから……」

また近くは、徹通義介禪師が、この聰明利発がわざわいして、道元禪師に法を伝えてもらうことができなかつた。

この瞬間から峨山の態度は一変した。

慎しみ深く大衆（修行僧）に一如した綿密な行持、きびしい坐禅修行。増上慢はミジンも感じられなくな

つた。しかし、半年経つても一年経つても「両箇の月」の疑雲はさらに晴れそうもない。そして、三年の月日が流れた正安三年（一二三〇年）二月二十三日、北陸の空には、寒月がすさまじいまでに冷たくこうこうときえわたつていた。その月の光を浴びて静かに坐禅にはげんでいる峨山の姿を見て、その心境の一段と深まつたことをはつきり読み取った瑩山禪師は、峨山の耳もとで指をはじいた。それはまことにささやかな音ではあつたが、峨山には、三年間なやみ続けた大疑困を打ち碎く大音響にひびいたのであつた。

「ああ、そうだ、このところだ！」

峨山には、月に両箇あり、といわれた瑩山禪師の心が、はつきり会得されたのであつた。

いても、それが日常生活に肉体化され実践化されて、喫茶喫飯から各自の仕事の上にまで、生活万般にわたりつてそのまま顕現してくるのでなかつたら眞のさとりとはいえず、したがつて「洞上の種草となしがたし」という、峨山の心の底をうがつた、瑩山禪師の鋭くきびしい指導だつた。峨山は、この一つにして二つ、二つにして一つの関連するところを、今こそはつきりとわがものとすることができたのである。瑩山禪師の教える真髓にふれることのできた峨山の歓びと感激は、たとえようのない大きなものだつたにちがいない。

このころから、瑩峨両尊の二つの月の光の一つ一つの輝きが国中を照らすにいたる、一心同体のめざましい教化活動がはじまるのである。そしてまた、瑩山禪師は、このころ、順々に月の光を受け継ぐように、お釈迦さまから永平（一祖懷辨禪師までの仏祖の伝記と法の光の赫々たるさまを説示しておられた。それが、道元禪寺の『正法眼藏』とともに宗門の一大宝典として有名な『伝光録』である。

大般若会拈香法語

六百金文尚未繙

祥雲瑞氣滿乾坤

總持良藥天甘露

利濟衆生養道根

恭惟山門此日、身代不動明王祭之令辰、莊嚴道場、謹請眼前此丘衆、転誦大般若經六百軸金文、仰廣大般若功德力、諷誦般若心經、消災妙吉祥陀羅尼、慈救呪、所集功德、奉供養、般若會上諸仏諸菩薩及十六善神、身代不動明王、一切護法諸天、當山土地合堂真宰、增加威光無量德海

專 祈

仏法興隆、國家昌平、聖壽無窮、万民富樂

更 祈

山門繁榮、諸災消除、當山總檀家中、並十方信心外護者、大般若經寄付者各々家内安全、子孫長久、諸經滿足、百事如意吉祥

至 禱

昭和六十一年五月二十八日不動明王大祭

大導師 佐藤 俊明老師

六百の金文 尚いまだ繙かざるに
祥雲瑞氣、乾坤に満つ
總持の良薬、天の甘露
衆生を利濟して、道根を養う

恭しく惟れば山門此日、身代不動明王大祭の令辰、道場を莊嚴し、謹んで眼前の比丘衆を請し、大般若經六百軸の金文を転誦し、廣大般若の功德力を仰ぎ、般若心經、消災妙吉祥陀羅尼、慈救呪を諷誦し、集むる所の功德は、般若會上諸仏諸菩薩及び十六善神、身代不動明王、一切護法の諸天、當山土地合堂の真宰、威光を増加せる無量の徳海に供養し奉り、

專 祈

仏法興隆、國家昌平、聖壽無窮、万民富樂ならんことを。

更に祈る

山門繁榮、諸災消除、當寺總檀家中、並びに十法信心の外護者、大般若經寄付者、各々家内安全。子孫長久、諸經満足、諸經満足、万事如意吉祥ならんことを。
至 禱